要望書

日頃から私ども富士山憲章に賛同する、富士山南麓のボランティア自然環境保全活動にご理解、ご支援をいただきありがとうございます。

私達は2012年よりトレイルラン(ウルトラトレイル・マウントフジ)植生保全環境調査を続けています。3年間に渡るモニタリング調査の結果、大規模トレイルランレースのコースとして利用された須山口登山歩道区間が急速に荒廃し、年々ひどくなる一方で、荒廃箇所は放置されたままであることを確認し記録しました。なかでも、森林生態系の基盤である土壌の侵食と流出は、地元登山道保存会の修復活動はあるものの、その回復に多くの年月と多額の費用を必要とし、原状回復を困難にしています。このままでは、公共の登山道が、自然景観や生物多様性を損ない、安全面から利用ができなくなる恐れがあります。

私達は度々、調査報告書などを通じて主催者に荒廃状況の確認、原状回復をお願いしてまいりましたが、現時点でも主催者による対応はなされていません。主催者の2014年環境調査報告では「影響が心配されている須山口でも踏圧その他の改変は殆ど確認されない」とし、荒廃を認めていません。もし、主催者が生物多様性の知見や自然環境保全の営みに配慮し、適切なコース選定、参加者数の決定、環境アセス、環境調査、運営管理を行っていたら、これら登山道の荒廃は、未然に防げたと言わざるを得ません。

大規模トレイルランレースが、このような不適切な管理運営で毎年開催されれば、「富士山南麓の自然環境は、2,000人の過剰な集中利用に耐える」との誤った認識を社会へ広め、今後の富士山自然環境の保全と利用に、計り知れない多大な悪影響をもたらします。

富士山エコレンジャー連絡会は会員の総意として、富士山南麓の登山道改変の再発防止にむけ、大規模トレイルランレースの主催者(地元行政を含む)に下記の誠実な対応をお願いし、関係監督行政へ適切な指導を強く要望いたします。

1.主催者は荒廃が見られたコース区間について、自主的に、生物多様性に配慮した原状回復を責任をもって行うこと。原状回復を行わない主催者に対しては、関係行政が開催の中止を指導すること。
2.大規模トレイルランレースのコースは標高1,000メートル以下の公道とすること。
3.やむなく、富士山南麓の登山道を利用する場合は参加人数を99人以下に制限し、自然環境への負荷を減らし、影響をモニタリングすること。
4.環境モニタリング調査は、コース全体とすること。事前、事後、1ヶ月後、3ヶ月後、1年後の状態を写真、ビデオ等で記録し、影響を追跡可能とすること。
5.自然環境保全地域、緑の回廊、保護林は使用せず、夜間は利用しないこと。
6.事前に自然環境への影響アセスを十分行い、土壌侵食・流出が発生すると予想される概ね10度以上の傾斜地はコースとして利用しないこと。
7.外来種、移入種の持ち込み、持ち出し、移動が行われないよう対応措置をとること。

2015 年 7 月 27 日
富士山エコレンジャー連絡会
会長　仁藤　浪

連絡先　植生保全環境調査担当　吉永耕一
(e メール koyoshina@nifty.com)

賛同する富士山自然環境保全団体

富士自然観察の会、富士宮自然観察の会、富士山自然の森づくり、富士箱根伊豆自然観察指導員連絡会、富士山クラブ、富士山の自然を守る会、ふじ山森の会、柿田川みどりのトラスト、香貫山の自然を守る会、富士山ナショナルトラスト、富士に学ぶ会、FJ エコチーム(順不同)

富士山憲章

1 富士山の自然を学び、親しみ、豊かな恵みに感謝しよう。
1 富士山の美しい自然を大切に守り、豊かな文化を育もう。
1 富士山の自然環境への負荷を減らし、人との共生を図ろう。
1 富士山の環境保全のために、一人ひとりが積極的に行動しよう。
1 富士山の自然、景観、歴史・文化を後世に末長く継承しよう。

平成 10 年 11 月 18 日　　静岡県・山梨県

添付　『富士山エコレンジャー連絡会・トレイルラン植生保全環境調査まとめ』
　　『ウルトラトレイル・マウントフジの概要』

以上

富士山エコレンジャー連絡会・トレイルラン植生保全環境調査まとめ　2015 年 7 月 27 日

1.調査参加者 17 人

秋山弘司、伊井義博、石川明夫、海野哲朗、小澤英雄、萩野克己、小島正、佐野守茂、鈴木啓之、関直人、谷澤孟、中島利男、仁藤浪、藤川孝信、星野輝一、吉永厚子、吉永耕一

2.調査活動　延べ 34 日　96 人日(報告書の作成、説明、送付作業は除く)

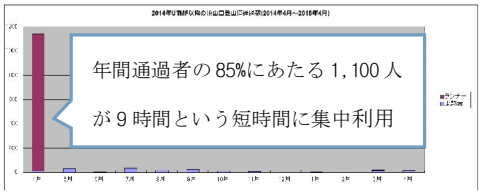
年度、通過者数	調査区間(通過者数は須山口登山道による)	作業日数、人日
2012 年 700 人	須山口登山道(標高 1,090m～1,370m)	延べ 5 日　10 人日
2013 年 1,800 人	須山口登山道(標高 1090m～水が塚公園)(水ヶ塚公園～下山歩道 1.5 合)(下山歩道 1.5 合～御殿場口 5 合)	延べ 18 日　51 人日
2014 年 1,100 人	須山口登山道（水ヶ塚公園～標高 1,090m)、天子山系(佐折～天子ケ岳～長者ケ岳)	延べ 11 日　35 人日

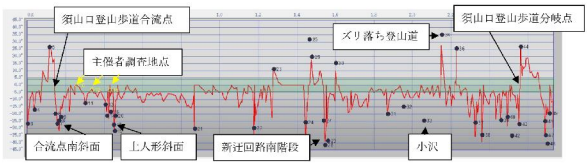
3.調査による記録・確認事項

【要旨】3 年間に渡る大規模トレイルランレースの環境調査で、富士山南麓の自然環境へ過大な負荷が確認され記録された。1,000 人を上回る大規模連続踏圧の過剰な負荷とその後の多量降雨(年平均 3,000mm 以上)により土壌の侵食や流出がおこり、年々ひどくなる一方で、結果的に登山道が改変され、荒廃箇所は現在も放置されたままである。

荒廃の放置は、来訪者の通行、安全に悪影響があり、現状では登山道周辺の生物多様性が低下したままで、豊かな自然景観が損なわれている。

●大規模集中型(下左図)の連続踏圧(2014 年は年間来訪者の 85%に当たる 1,100 人が 9 時間で通過。累積荷重およそ 55 トンに相当)によって登山道表層が破壊され、落葉落枝など保護層が消失した。踏みつけによる樹木倒壊やショートカット地点で植生損傷が見られた。





(図　須山口登山道でのコース傾斜と登山道荒廃地点)

●破壊された登山道表層部分に、通過後の降雨により水ミチが形成される。概ね 10 度以上の傾斜地の路面に発生する地表流の掃流力により登山道の土壌侵食や流出が多発(上右図)

●流出土砂が周辺の涸れ沢に堆積し、降雨時に表面水の増加とともに沢周辺の崩壊を加速

●繰り返し利用により土壌侵食部を避けて通過するため、登山道拡幅、複線化が起こる。斜面の形状が変化し、植生破壊箇所が拡大

●トレイルラン・レース特有の登山道側壁(法面)通過による荒廃進行

●昼夜の長時間利用(夜間の視認低下、光、騒音)による野生動植物への悪影響の懸念

●野外排泄やゴミの放置、国内外移入種(外来種)による生態系への悪影響の懸念

●主催者は影響が少ない平坦地を調査。主催者は荒廃を放置し、原状回復に対する責任を放棄

2014年に初めて、主催者調査地点が判明し、傾斜5度未満の平坦地であることを確認した。平坦地で土壌硬度を測定していた主催者調査員に、「計測地点の前後数メートル以内に傾斜地の荒廃箇所が見られるのに、なぜ影響の少ない平坦地だけを調査しているのか」と問うたところ、「調査地点の選定は実行委員会の指定」との返答を得た。

2014年の主催者調査は、須山口登山道区間の距離にして1%未満の平坦地を対象としている。須山口登山道区間2.2kmの約5割は5度以上の傾斜地であり、主催者の調査には荒廃が多発した傾斜地は含まれず、調査地点の選定基準が不明確で不十分だ。

主催者は2014年の報告書で「影響が心配されている須山口でも踏圧その他の改変は殆ど確認されない」としている。しかし、実際は、私達が記録したように傾斜地に荒廃箇所が多発している。荒廃箇所を認めずに、コース選定や参加者数の決定、通過時の路面保護など環境保全対策はできない。主催者は富士山南麓の自然環境を利用するのみで、荒廃は認めず、放置し、原状回復など自然環境保全の責任は果たしていない。

4.調査結果の説明、送付などの共有活動

■説明: 静岡県、環境省、林野庁、地元行政、環境省沼津自然保護官事務所、静岡森林管理署、裾野市、御殿場市、NHK静岡、ふじさんネットワーク富士山勉強会、岡山スポーツフォーラム、愛媛スポーツシンポジウム、その他報告書送付:主催者(NPO法人富士トレイルランナーズ倶楽部、富士河口湖町、鳴沢村、身延町、富士宮市、富士市、裾野市、御殿場市、小山町、山中湖村、忍野村、富士吉田市)、後援者(在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本、外務省、文部科学省、国土交通省、観光庁、静岡新聞社、The North Face)、関連学会、協会、マスコミ各社

■記事掲載:『富士山トレラン環境破壊許しません』静岡新聞2013年6月17日、『ウルトラトレイル見直しを』岳南朝日2013年12月31日、『保全を願う富士山エコレンジャー』御堂さん2014年7月号、『トレイルランの明日を考える』RUN + TRAIL8　2014年7月,『トレイルランニングと自然保護シンポジウム』愛媛新聞2014年6月12日・山と渓谷2014年8月、『大規模レース後の森の小道』創文企画「ランニングの世界18」2014年10月

5.調査報告後の変化

2013年　富士山休養林・須山口登山道世界遺産区間(文化財保護法手続きなしに利用)・国立公園特別地域へコース拡張、静岡県富士山麓植生保全パトロール実施

2014年　静岡県・山梨県後援取り止め、富士山休養林・須山口登山道世界遺産区間・国立公園特別地域コース中止、静岡県ウルトラトレイル・マウントフジ明神峠自然環境保全地域現地調査実施と主催者指導、同富士山麓外来植物等調査実施

2015年　「環境省自然公園トレイルラン大会等の取扱い」、「東京都自然公園利用ルール」制定

「環境省自然公園トレイルラン大会等の取扱い」では、主催者による適切なモニタリング調査の必要性が明記され、万が一影響があった場合は、主催者による原状回復が要請されている。

ウルトラトレイル・マウントフジの概要

主催　ウルトラトレイル・マウントフジ実行委員会

名誉実行委員長　三浦 雄一郎　（プロスキーヤー、冒険家）

実行委員長　　鏑木 毅（トレイルラン・プロデューサー）

実行委員　　村越 真（環境調査、静岡大学教育学部教授）

実行委員　　福田 六花（医師、ミュージシャン）

実行委員会　　NPO 法人 富士トレイルランナーズ倶楽部

（鏑木 毅理事長、千葉 達雄事務局長(株)ソトエ代表取締役、

中尾 益巳理事 NHK「激走モンブラン!」統括プロデューサー、

三浦 務理事（株)ゴールドウイン）

山梨県富士吉田市　（堀内 茂市長）

山梨県富士河口湖町（渡邊 凱保町長）

山梨県山中湖村　（高村 文教村長）

山梨県忍野村　　（天野 康則村長）

山梨県鳴沢村　　（小林 優村長）

山梨県身延町　　（望月 仁司町長）

静岡県富士宮市（須藤 秀忠市長）

静岡県富士市　（小長井 義正市長）

静岡県裾野市　（髙村 謙二市長）

静岡県御殿場市　（若林 洋平市長）

静岡県小山町　（込山 正秀町長）

特別協賛　The North Face、ゴアテックス、(株)ゴールドウイン

後援　Ultra-Trail du Mont-Blanc

開催状況　（UTMF: 一周、STY: 半周）

回	実施日	UTMF(出走/完走)	STY（同左）	周回方向
1 回目	平成 24 年 5 月 18 日～20 日	852 人/611 人	1,177 人/991 人	時計回り
2 回目	平成 25 年 4 月 26 日～28 日	991 人/726 人	937 人/864 人	反時計回り
3 回目	平成 26 年 4 月 25 日～27 日	1,422 人/849 人	968 人/691 人	時計回り
4 回目	平成 27 年 9 月 25 日～27 日予定	1,400 人募集	1,000 人募集	反時計回り

主催者による調査報告書(須山口登山道関連抜粋)

-植生 ・土壌硬度は全体としては顕著で深刻な影響があったとは言えない(主催者 2012 年)

-レースが植生、土壌硬度、路面の面から見たとき回復不能かつ深刻な影響を与えるものではない(同 2013 年)

-影響が心配されている須山口でも踏圧その他の改変は殆ど確認されない(同 2014 年)